

高石市教育委員会定例会会議録

(平成 30 年 8 月定例会)

開会及び閉会の年月日時

開 会	平成 30 年 8 月 8 日午後 4 時 30 分
閉 会	平成 30 年 8 月 8 日午後 5 時 30 分

会議に出席した者の職及び氏名

委 員	教 育 長 : 佐 野 慶 子 委 員 : 西 中 隆 委 員 : 西 村 陽 子 委 員 : 吉 村 文 一
事務局職員	教 育 部 長 : 細 越 浩 嗣 教育部次長兼学校教育課長 : 吉 田 種 司 学 校 教 育 課 参 事 : 松 田 訓 一 学 校 教 育 課 長 代 理 : 杉 谷 賢 太 郎 教 育 研 究 セ ン タ ー 所 長 : 菅 原 庸 晴 学 校 教 育 課 主 幹 : 中 西 い つ 子 学 校 教 育 課 主 幹 : 黒 井 将 典 学 校 教 育 課 主 幹 : 杉 原 敦 史 学 校 教 育 課 主 幹 : 長 山 浩 二 学 校 教 育 課 主 幹 : 峯 上 寿 仁

議題及び議事の要旨及び議決事項

・第 2 部 議案第 1 号 平成 31 年度使用高石市立中学校教科用図書採択について

学校教育課長	<p>議案第 1 号、平成31年度使用高石市立中学校教科用図書採択について、ご説明を申し上げます。</p> <p>これは平成31年度に高石市立中学校の生徒が使用する特別の教科道徳の教科書について採択をいただきたく、教育委員会の議決を求めるものである。</p> <p>本議案の提案理由については、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第21条第6号並びに教科書の発行に関する臨時措置法第7条第1項及び高石市教育委員会通則第2条第7号に基づき、平成31年度に高石市立中学校で使用する特別の教科道徳の教科用図書採択を行うものである。</p> <p>そこで、去る平成30年7月9日に開催いたしました高石市教科用図書選定委員会の報告をもとに十分ご審議を賜り、平成31年度に高石市立の中学校で使用する特別の教科道徳の教科用図書を決定していただきたくお願い申し上げます。</p> <p>なお、既に教育委員の皆様にはご覧いただいたが、今回の採択に際し、高石市教育委員会に宛てた中学校道徳教科書採択方針に関する要請書が 34 団体、個人 41 名より提出されている。また、高石市教育委員会宛ての 2019 年度使用中学校道徳教科書の採択に当たっての要望書が 1 団体より提出されている。</p>
佐野教育長	<p>各委員の先生方には、教育委員会学校教育課並びに高石市立教育研究センターに教科用図書の見本本が配架されて以来、各々研究し、またこれまで理解を深めるための準備をしていただき、まことにありが</p>

	<p>とうございます。審議に当たり、委員の皆様と意見を交わしながら採択を決定していきたいと思う。</p> <p>それでは、まず、選定に至る経過の説明を事務局よりお願いしたい。</p>
教育部長	<p>高石市立義務教育諸学校教科用図書選定委員会規則に基づき、本年4月より教科用図書の採択事務に取りかかったところである。小学校校長1名、中学校校長1名、保護者代表2名、教育委員会事務局2名からなる第1回選定委員会を5月25日に開催した。</p> <p>また、2市1町で5月11日に2市1町教科用図書選定資料作成委員会及び調査委員会を開催し、教科用図書採択に係る調査資料の作成に取りかかり、約1カ月半の調査を経て報告書をまとめていただいた。</p> <p>なお、2市1町教科用図書選定資料作成委員会は、本市と泉大津市、忠岡町の2市1町で設置しており、構成としては、選定資料作成委員に2市1町の中学校教頭を任命し、選定資料作成のための調査員には、同じく2市1町の中学校の教諭を任命した。</p> <p>7月2日に、2市1町で平成31年度使用中学校教科用図書特別の教科道徳選定資料報告会を開催し、教科用図書選定資料作成委員会の調査に基づき作成された報告書の説明を受けるとともに、第2回選定委員会を開催した。</p> <p>その後、第3回選定委員会を7月9日に開催し、前回の報告をもとに検討を行った。</p> <p>以上が経過である。</p>
佐野教育長	教科書展示について、いつ頃開催されたのか。
学校教育課長	教科書展示会については、法令に基づき、高石市立教育研究センターにおいて、平成30年6月11日から平成30年7月19日に教科書展示会を行った。高石市内より21名の方、高石市外より7名の方が閲覧にお越しになられた。
教育部長	<p>本日は、各委員のほうからの質疑等については、選定委員長である私と、選定委員会のメンバーである教育部次長兼学校教育課長から選定委員会の意見を教育委員会に報告するという形でお話を進めていきたいと思っているので、よろしくお願いしたい。</p>
佐野教育長	<p>特別の教科道徳について、小学校において昨年度採択した教科用図書を活用した学習が進められているところである。保護者の方、市民の皆さん方の関心も高く、採択に関わる私たちも自己の責任の重大さを認識し、今日まで研究を進めてきた。選定委員会からの報告をいただきながら審議を進めてまいりたいと思う。</p> <p>それでは、中学校の特別の教科道徳についての審議をお願いしたい。まず、各社の教科書の特長について、選定委員会からの意見をお願いしたい。</p>
教育部長	<p>それでは、各社について報告申し上げる。</p> <p>一言で言うと、各社ともに学習指導要領のよりよく生きるための基盤となる道徳性を養うための工夫が非常にされており、それぞれの特長について、まず東京書籍から報告申し上げます。</p> <p>教科書のサイズは、いわゆるA B判のワイド判になっており、B 5判よりは少し横に長い形になっている。</p> <p>各教材の冒頭に学習するテーマが示されており、生徒にとって学習しやすい工夫がされている。テーマについて、例えば1年生の14ページ、10ページでもいいが、冒頭に「さらなる高みを目指して」とあり、こういう学習のテーマがまず設けられている。</p> <p>また、巻頭には話し合いの手引き、巻末には学習時に考え等を向上</p>

させるのに活用できるツールの付録がある。東京書籍はとにかく付録が多いのが特長で、話し合い活動のときに、教科書を開きながら、話し合いはこのようなするという工夫がされており、それが話し合う手引きである。

巻末は、学習時に考え等を向上するツールの付録ということで、例えば心情円という、今の自分の考えを円グラフにして示し、話し合いをするときのための紙のホワイトボードのページが設けられている。このような、考え、議論する道徳の学習展開の意識が非常に強く、教材の内容、構成についても非常にバランスがよいと考える。

ただ、心情円などホワイトボードについては、本当に使うのかというような疑問を感じる意見もあった。

他に、振り返りシートについて、いろいろ賛否両論があるが、切り取り式で使いやすく、大きくりの学習評価をするための評価資料としては活用しやすいのではないかという意見もあった。

続いて、学校図書である。

学校図書も同じくサイズはA B判のワイド判で、東京書籍と同じで、少し広くなっている。

この教科書についても、各教材の冒頭に道徳の内容項目が示されている。例えば1年生の6ページであるが、一番はじめの色の部分に、「公正、公平、社会正義」、これが内容項目で22項目ほどあるが、この項目について、ずっとついており、生徒が目標を明確にして学習に取り組める工夫がされている。

巻頭には、学級づくりに関する内容のページということで、1年生の最初の4ページに、聞こう、話そう、サイコロトークという、いわゆる学級づくりのときの初めて出会う子供たちがアイスブレイキングするという形でサイコロトークをしながら、自分のいろいろな自己紹介をしていく、そういう学級づくりの手法がまず載っている。これはなぜかという、授業においては互いに認め合い、自由に意見交換ができる良好な学級集団が授業には必要であるということ意識した工夫がされている。

また、学期ごとに3回分に学びの記録ということで、1年生の81ページと173ページ、それから221ページ、今、これは大体学期ごとであると思うが、3回分のページが設けられており、教材ごとに自分の考え等をまとめられるようになっている。教科書への書き込みで、生徒一人一人の記録を確認し、評価活動につなげるのに使えるが、教科書に書き込むところに少し不便さを感じられるという意見があった。

全体的には、内容は充実しているが、指導者の工夫を多く必要とすることを感じた教科書である。

続いて、教育出版である。

教育出版について、従来の教科書のサイズのB 5判となっている。

1年生の6ページを見ていただくと、各教材名があり、教材名の下欄に、6ページの場合は、「あなたが うまれた ひ」というタイトルの教材に対して、あなたが生まれた日にこの世界では何が起こっていたのだろう、という問いかけ文が学習の目当てとなって示されている。そういった生徒が目標を明確にして学習に取り組める工夫がされている。

1年生では、内容に関して自分自身に関すること、2・3年生では、人とのかかわり、集団や社会とのかかわりの教材を増やしており、学年の発達段階に応じた内容項目の分量を配分する工夫がされている。

また、生命の尊重を意識した工夫として、死を明確にした教材を扱っている点が特長であるが、その内容が少し難しいため、教員の指導力によって差が生じるのではないかという意見があった。

巻末には、学期ごとの学びを記録するページが設けられているが、少しスペースが狭く、評価の資料として活用するには、やや難しいと考えている。これが教育出版である。

続いて、光村図書である。

光村図書のサイズもB5判である。

1年生の8ページを見ていただくと、各教材の冒頭に、このページは「自分で決めるって？」ということが教材の名前であるが、その右側の薄緑のところ「自主、自律、自由と責任」という形で内容項目が示されている。そういった生徒が目標を明確にして学習に取り組めるような工夫がされていることが特長である。

光村図書については、1年間を4つのシーズンに分け、その中にテーマごとのユニットを設け、生徒の成長段階を意識した配列の工夫がされている。内容項目についてもバランスよく掲載されており、教材に偏りがないような工夫がされている。

また、小学校低学年の定番として、1年生でよく使われ、1・2年で出てくる「はしのうえのおおかみ」、「泣いた赤おに」、「手品師」などという教材が小学校にあるが、その教材を再度、光村の1年生では「はしのうえのおおかみ」、2年生では「泣いた赤おに」、3年生では「手品師」と、中学校でもう一度、小学校で学習した教材を再度学習し、自分の小学校時代とは違う考え方が出てくるのではないか、そういう学び直しの機会を設けているところが非常に興味深いところである。

教材ごとに記録を書くスペースで、「私の気づき」が量的に適切で書きやすく、評価にも活用しやすいものである。

続いて、日本文教出版である。

この教科書についても、サイズはB5判で、保護者の方の意見であったが、子供から見ると、一番教科書としては興味深い教科書であり、今どきのイラストが興味を引くのではないかという意見があった。

1年生の6ページに、タイトルは「サッカーの漫画を描きたい」という、非常に有名な「キャプテン翼」の作者の高橋陽一さんの教材であるが、表題の上に「困難を乗り越える力」というのが示されており、これが学習するテーマとなっている。以上のように、生徒にとってはその日の学習しやすい工夫がされているのではないかという意見があった。

話し合いをする教材では、学習の進め方を掲載し、考え、議論する道徳の展開がしやすい工夫がされている。

また、今までの中で異なるのは、2分冊の教科書となっており、ノートがついているというのが特長である。

別冊の道徳ノートには、1教材に1ページで教材とリンクし、自分や友達の見解を記録できるようになっており、自己の生き方や物事を多面的・多角的に考えられる工夫がされている。

いじめについても、いじめの行為を法と照らし合わせ、しっかりと学習できる構成となっているのが特長である。

続いて、学研教育みらいである。

この教科書の特長は、他の教科書と異なり格段に大きいサイズで、A4判になっている。A4判のセールスポイントについて、開いてい

ただくと、教材的には非常に字は小さいが、紙面が大きいので余白があることで、非常に見やすいという意見があったが、反対に中学生からすると、すごく持ちにくく不便ではないかという意見があった。

他の教科書と異なるのは、1年生の10ページに「掃除の神様が教えてくれたこと」というタイトルが出ているが、例えば勉強するポイントである内容・項目やテーマなどが載っていない。これはあえてそういうふうにしており、主題を教材の冒頭に記載しないことが特長であり、設問の例も少なく、生徒がみずから主体的に課題を見つけ、解決する資質や能力を培う工夫であると考えるが、生徒にとって何について考えるのかがわかりづらい面もあり、教員の指導力によっても差が生じることが考えられるという意見があった。

命の尊さについて考える機会を設けている構成については、非常に高い評価があった。

続いて、廣済堂あかつきである。

教科書のサイズは、少し広いA Bワイド判である。

あかつきの教科書も、4ページをあけていただくと、教材のタイトルは「この人生の主人公」としか書いていない。これも主題名を冒頭に記載せずに、生徒がみずから主体的に課題を見つけ、解決する資質や能力を培う工夫というふうを考えている。しかし、目次の色分け等もなく、教材のタイトルのみでは、生徒が何について学習するのはっきりしない面があるという意見があった。

また、この教科書も2分冊方式である。分冊の中学生の道徳ノートであるが、こちらは教材ごとではなく、内容・項目ごとの活用となっている。これが構成の特長であるが、教材ごとにノートを活用することが少しやりにくいのではないかという意見もあった。

また、巻末の自己評価を5段階で記す欄があるが、これは教員が授業改善の参考資料として扱うという点で活用すれば有効であると考えられる。ただ、子供たちの自己評価を5段階で評価するのはどうかという意見もあった。自己の学びを客観視できるという考えと、評価を数値化しているという考えで賛否両論分かれるような工夫であると考えられる。

また、従来の読み物資料を中心とする授業形態では、非常に充実した内容の教科書であると考えられる。

最後に、日本教科書である。

日本教科書もサイズはB 5判である。

1年生の8ページに、これは非常に定番の資料である「銀色のシャープペンシル」が出ているが、これも学研とあかつきと同様に、主題名を冒頭に記載していない。生徒がみずから主体的に課題を見つけ、解決する資質や能力を培う工夫がされていると考える。これも同じように、教材のタイトルのみでは生徒が何について学習するのはっきりしない面があるという意見もあった。

また、表紙をあけていただき、目次のところを少し説明させていただくが、A、B、C、Dという内容項目の4つの大きな視点であるが、自分と向き合う、人とのかかわり、集団や社会とのかかわり、自然や崇高なものとのかかわりということで、この教科書は内容・項目の順番どおりの教材の配列になっている。これは学習する順番や重点を置く時期等で、学校の実態に即して自由に配列して指導計画を立てられることが特長であるが、逆に学校の教員からすると、指導計画を一から立てなければならないということで、少し時間的なことや読み込み等の教材研究の時間が非常にかかるのではないかと、そういった負

	<p>担感というのがすごく感じるという意見があった。また、いわゆる教員の指導力に差が生じて、経験の浅い教員が扱うのは難しいと考えられるという意見もあった。</p> <p>さらに、他の7社と比べて、伝統・文化や郷土愛、愛国心に関する教材に特長があり、例えば1年生では吉田松陰をとりあげ、2年生では橋本左内を、3年生では伊勢神宮という形で、郷土愛、愛国心を非常に強く色を出しているという特長がある。</p> <p>以上、簡単ではあるが、各8社の特長である。</p>
佐野教育長	<p>私も各社を読ませていただき、教科書会社それぞれが本当にそれぞれの観点で道德の研究を進めておられると感じる。</p>
西村委員	<p>選定委員長の説明によると、教科書会社の特長として、主題やテーマを冒頭に明示しているものと、これを明示せずに資料名だけを載せているものとあるが、大きな特長として2つのパターンに分かれるが、各社の狙いや工夫について、もう少し整理して説明いただきたい。</p>
学校教育課長	<p>先ほど各社の特長を選定委員長より説明させていただいた中にもあったが、8社中の5社において、主題やテーマを冒頭に示している。</p> <p>東京書籍と日本文教出版については、教材の冒頭に主題を示すことで、生徒が見通しを持って考えられるような工夫がなされている。2社とも教材の末尾に2つの設問例を掲載し、何について考えるのかについてわかりやすくする工夫もされている。</p> <p>学校図書と光村図書については、教材の冒頭に内容項目を示し、生徒が課題意識を持って考えられるように工夫がされている。教材の末尾には、冒頭に示している内容・項目に沿って考えを深めることができるような設問例を載せ、考える内容を明確にする工夫もされている。</p> <p>教育出版については、教材の冒頭に導入となる問いを示している。学びの方向性をわかりやすくする工夫がされている。資料の末尾には、3つの設問例を掲載し、何について考えるのかについてわかりやすくする工夫がされている。</p> <p>学研教育みらい、あかつき、日本教科書の3社については、冒頭に主題が示されていない。生徒がみずから問題意識を持って主体的に考えられるように工夫がされている。</p>
西中委員	<p>3社の冒頭に課題やテーマが出ていないという教科書、これは私は子供自身が課題を学習の中で読み取り、あるいは考えていくという点では非常によいと思うが、ただ、現実の問題として、限られた1時間の中で一つのテーマで、子供たちが話し合い、その中で課題なりテーマを読み取り、まとめていくことは非常に難しいのではないかと思います。理想と現実という意味で、現実の場面ではなかなか難しいのではないかと考える。ある程度、この教材はこんなテーマで考えるということが明確になっていると、子供たちも非常に考えやすい、あるいは先生方も指導しやすいと思う。そのテーマに沿って文章を読み取り、議論し、結論を導いていくために、やはり冒頭に課題やテーマがあるほうがよいのではないかと思います。</p>
吉村委員	<p>私も西中先生と同様に、公立の学校の特殊性というか、特長というか、どうしても学力にばらつきのある生徒さんの集団を教えないといけないということと、もう一つ、最近、ベテランの先生方が退職なされて、若い教員の先生もどんどんふえてきて、若い教員がいけないというのではないが、どうしても経験不足等があるので、冒頭に主題を出して進めていくほうが教える側、教えられる側も学びを深められる</p>

	<p>というふうに私は考えているので、冒頭に説明して、生徒さんたちとディスカッションして、生徒の意見を発表してもらってまとめるということが、やはり1時間でやろうと思えば、なかなか最初に主題が明確でないと進めにくいのではないかと私も思う。</p>
西村委員	<p>今、主題を示して、生徒さんに議論してもらうために、発問の仕方も大事であると思うが、教科書に記載されている発問例の量や、記載の仕方について、各社それぞれどのような違いがあり、どのような特長があるのか、その辺を少し説明いただきたい。</p>
教育部長	<p>今回の道徳の授業のキーワードになっているのが、考え、議論する道徳という、その部分が特長であるが、各社の掲載する発問例というのは、物事を広い視野から多面的・多角的に考えて、話し合い、意見交換を促す工夫が非常にされているというのが特徴である。</p> <p>例えば、日本文教出版であるが、1年生の10ページの最後のところにアイコンがあり、「考えてみよう」とか、「自分に+1」という、この欄がいわゆる考える、子供に考えさせる発問的などころであり、このようなものを設けて、自己を見つめ直すという工夫がされている。</p> <p>また、学校図書の1年生の13ページの「学びに向かうために」という欄に、「考えよう」、それから「意見交換」という欄、そして最後に「見つめよう」というふうな、「見つめよう」というのは書く、その前の「意見交換」は話し合う、最初の「考えよう」は自分で考えるという、そういうふうな観点を含めて、活動に違いを出す設問というのが工夫されている。</p> <p>また、教育出版について、教育出版の1年生の11ページに、「学びの道しるべ」という、この「学びの道しるべ」に3つの発問が設定されており、大体1教材について3つである。ということで、量的にも内容的にもわかりやすい設問というふうに工夫がされている。</p> <p>光村図書について、11ページを見ていただきたい。光村図書の11ページに「考える観点」というのと、それから「見方を変えて」、それから「つなげよう」ということで、こういうふうな場面で、そういう考え、議論する欄というのを生徒に示しながら、考える方向性に違いを出す、そういう設問の工夫がされている。</p> <p>また、学研教育みらいについて、15ページを見ていただきたい。これは教材に設問例を1つしか掲載していない。15ページであると、自分に合うのはどんな仕事かを考えてみようというこの1つであるが、そのような形で、自分自身でその教材について主体的に考えさせようという、そういう意図が見られるのが特長である。</p> <p>これについて、少し時間の都合で、この5社で説明させていただいたが、発問例が多かったら、その発問に沿った展開に縛られて、話し合いを通して考えを深めるまでには至らずに、生徒が発問に対する考えを発表する前にとどまるということが懸念される。反対に発問例が少ないと、生徒が考え、話し合い、意見交換が活発にできるような問いかけをするために、しっかりと資料の読み込み、教材研究をすることが必要となるという、このような一長一短があると思う。</p>
吉村委員	<p>色々な学力の生徒に色々な経験年数の先生が短時間の間に考え、議論する道徳という学習を展開していくということになれば、設問が少な過ぎてもいけないし、多過ぎてもいけないということなので、やはり二、三題の適当な発問例がある教科書がいいのではないかと思います。</p>
西村委員	<p>そういう意味では、先ほどご紹介いただいた学校図書、教育出版、光村図書、日本文教出版が、発問例の意図も明確になるような工夫が</p>

	<p>されているということになるかと考える。</p>
西中委員	<p>選定委員長から先ほど話が先ほど言われていたように私も同じように考える。やはりこの光村図書ですが、学びをテーマということで、考える観点、見方を変えてつなげようという形で、5つの観点を出しているわけである。1時間の道徳の授業の中で5つもの観点があれば大変じゃないかと思う。二問から三問で焦点化して考え、議論していくというような形が非常に良いと思う。あまり多過ぎても、無くてもいけないということで、二、三問ぐらいが一番適当ではないかと考える。</p>
佐野教育長	<p>それでは、続いて各社の取り上げている具体的な教材のテーマに関する特色について、委員の皆様からご意見をいただきたいと思う。</p>
西中委員	<p>私は、スマートフォンが非常に今普及しているの、これについて教科書でどのように扱っているかということが非常に大事ではないかと思う。非常に身近な問題として、今、子供たちの中で、特に情報モラルという点でしっかりと指導していく必要があるのではかと思っています。最近、スマートフォンの所持率も非常に中学生は上がっている、都市部ではほとんどの子供が持っているのではないかと思う。その中で私は人権擁護委員という仕事をしているが、このスマートフォンを使った誹謗中傷といった悪質な書き込みで、先生方が気づかれないところでいじめ問題が発生している。やはり道徳の時間にきっちり情報モラルを指導していくことが非常に大事ではないかと思う。だから、そういう面を初年から扱っている教科書であることが非常に大事だと思うが、その点はどうか。</p>
学校教育課長	<p>西中委員のご指摘のように、本市において、中学校は携帯電話・スマートフォンは持ち込みを禁止にしているが、実際には家庭ではたくさんの生徒が所持しているということはアンケート等から明らかになっている。その中で、各社においても、道徳の教科書において情報モラルがかなり取り上げられており、かつ丁寧に取り上げられている。</p> <p>例えば、教育出版であるが、各学年、これは同じページであるが、3ページに必ず「情報とよりよくつき合う」ということで、例えば3年生であれば、歩きスマホをどう思うか、とか、1年生であれば、自分で決めるルールとマナーである。かなりルールとマナーが子供たちにとってきちんと決められていないという現実もある。そのようなテーマで、「情報とよりよくつき合う」ということを示している。情報社会で生きていく上で必要なことを3年間を通して考えていけるような工夫がされていると思う。</p> <p>また、日本文教出版では、例えば1年生の92ページであるが、これは漫画で示しているが、「使っても大丈夫？」ということで、これは情報モラルのところで画像をとって、それをアップしていくというような内容である。このようなことを取り上げている。情報モラルについて考える教材と、その次にコラムも組み合わせており、ユニットをつくることによって、表題について考える上で必要な資料を効果的に配置して、考えを深めやすくするという工夫がされていると思う。</p> <p>また、学研教育みらいでは、情報モラルを扱う教材についてはピンク色で、情報モラルが分かるように、この教材の情報モラルについて学習するんですよ、ということが分かるように目次にも、本文の右下にも記載されている。このような形で情報社会における生き方を考える教材を重点的に扱うという工夫がされているということである。</p>
西村委員	<p>教育出版の場合は、今、説明のように、3学年を通して深く考えるテーマということで、特にテーマを設定している点が良いと思う。例</p>

	<p>えば1年生では「自分で決める」ということで、スマホの使い方を自分で決める、時間であるとか、自分なりの関わり方であったりとか、友達とのスマホを通じての関係といった身近な問題を取り上げて、2年生になればSNSに潜む危険性であるとか、あるいは歩きスマホという社会問題というように視野が広がるように工夫されているように思う。それから、日本文教出版であるが、これもご説明があったように、教材とコラムがユニットになっているということで、例えば3年生の教材などでは、教材は「ある朝のできごと」ということで、中学生自身が歩きスマホのことについて、中学生を主体にしたストーリーが教材で取り上げられていて、コラムでは、3年生の場合であれば、「ネットワーク社会の落とし穴」ということで、匿名性であるとか、個人情報の問題であるとか、そういうネットワーク社会を生きていく上で知っておくべき知識を身につけることができるように工夫されていると思いました。</p>
吉村委員	<p>今、お話しがあったように、やはり身近な問題として気づきが持てるような工夫がある教科書がいいと思う。特に日本文教の教材と関連するコラムが、ちょうど1対1のユニットになっているので、教材のストーリーから自己を見つめ直すことができ、またコラムの内容でも、他人の写真を無断で使用するのであったり、CDなどを無断でコピーするとか、著作権の問題であるとか、非常に身近な問題を取り上げているというような、学ぶ側からしたら、実際に起こるとなので分かりやすい。写真を無断で使用されると、もう一生消すことができない。一旦拡散すれば、もう取り返しがつかないというようなこともあるので、この辺はやはり具体的に勉強できる。そして、今まで自分たちがやっていることを見つめ直して、やっぱりいけないことはいけないことだということが学べて、コラムの内容を要するに自分に置きかえて、主体的に学べるように工夫されているのが非常にいいのではないかと思う。</p>
佐野教育長	<p>今、先生方からご意見をいただいたように、スマホやSNSが普及した今日の社会であるため、生徒にとっても情報モラルを身近な問題として学ぶ機会がとても大切だと思う。近年は、西村先生がおっしゃっておられたように、SNSなどのトラブルも要因の一つとなって、中学生が自ら命を絶つという痛ましい報道もある。道徳の内容・項目に生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない命を尊重することについて、各社においてどのような取り扱いになっているのか。</p>
学校教育課長	<p>各8社とも生命の尊さについて考える教材については、深く考えることができる教材を掲載して、充実させているところである。例えば東京書籍では、3学年ともに生命の尊さを考える教材を複数組み合わせた「いのちを考える」というユニットをつくっている。命について重点的に考えられるように配列も工夫されている。</p> <p>また、学校図書では、生命の尊さについて考える教材として、生徒に最も近い家族に関する教材を重点的に取り扱い、自己を見つめ、自分の命や生き方を考えることに結びつけやすいという工夫はされている。</p> <p>また、教育出版では、先ほども申したが、各学年とも3ページであるが、3学年を通して、深く考えていきましょう、におきまして、生命の尊さを考えるという部分を示しており、重点的に考えるテーマとして示している。</p> <p>また、教育出版の1年生では、「よく生きること、よく死ぬこ</p>

	<p>と」。また、3年生では「ハゲワシと少女」という、死を明確にして生徒に考えさせる教材も扱っている。</p> <p>光村図書では、3学年ともに震災に関する教材を取り扱っている。震災を通して生命の尊さ、安全・防災について考えを深め、それを学習できるように取り扱っている。</p> <p>日本文教出版では、命の大切さをテーマとした教材を、1年生では、生徒にとって身近な家族をテーマとした教材を、3年生では社会的な問題として考える教材を扱っている。そのように、多面的・多角的に生命の尊さについて考える機会を学年に発達段階に応じて設定している点が特長となっている。</p>
西中委員	<p>東京書籍では、この複数教材のユニット化を工夫していて、ユニット化していると、深く考えるということで非常に良いと思う。単独の教材ではなくて、一つのユニットになって、そこで命について深く考えさせる、あるいは生徒に考えさせて、記述させるというふうなページも設けている点も良いのではないかと思う。</p>
吉村委員	<p>私は、教育出版が死というものを明確にして、生徒に考えさせるという教材を取り扱っているが、命の尊さということに対する意識をすごく感じるが、反対に内容として、尊厳死であったり、延命治療について書かれている点では、中学生にとっては難し過ぎるのではないかと思う。また、腎移植について扱っているところもあるので、脳死が欄外に少し載っているが、やはり少し説明が不十分ではないかと思う。反対に日本文教では、詳しく移植医療については説明はしているが、なかなか日本では移植のための脳死と、普通の一般的な死というような、死に関してダブルスタンダードがあるというのが非常に分かりにくいところである。以前に和田移植という心臓移植で殺人罪に問われたということがあって、日本人の宗教観というか、生死観には合わないというのは重々であるが、移植医療を進める上で脳死が出てきたということで、その辺を議論もせず、尊厳死というのを考えるのは少し難しいのではないかと思う。また、法の決まり、3年生で死刑制度が出てくるが、今年は特に死刑の執行が大変多かったということで、死刑制度を取り扱うということは、病死と違って、まだまだ生きられる人の命を奪うということについて取り扱っているということも、中学生には重たいのではないかと感じるが、その点はどうか。</p>
西中委員	<p>私もこれを見て、死刑制度について中学生に議論させるというのは、時期尚早ではないかと思う。ここに、死刑もやむを得ないという考えをあなたはどう思うだろうか、死刑制度は必要なのだろうか、必要ないのだろうか、とあるが、これは日本の国民の世論は8割以上が死刑制度を支持しているが、国際的には死刑制度を廃止している国が結構多い。そのため、国際的な世論でも賛否が分かれているような問題について、子供に議論をさせることは、先生方もこれを指導するのにどっちの立場に立つかによって変わってくるだろうが、大変重たい問題ではないかなと思う。特に、裁判員に必要な力はどんな力だろうということになると、死刑の裁判に関わり、裁判員の力まで問うということになると、中学生のレベルでは難しいと思う。</p>
西村委員	<p>確かに命の尊さを考えるために、どのような教材を取り上げるのかということは、すごく難しいところがあると思う。その点であるが、日本文教出版は、先ほど説明があったように、1年生では家族の誕生というような身近な存在である家族をテーマにした教材を取り上げ、2年生では、160ページであるが、骨肉腫という病気になった中学生が闘病して、病気と闘いながら、本当に懸命に生き抜いた姿と、その中</p>

	<p>学生のメッセージが載っていて、中学生の子供たちにすごく心に響く教材ではないかと感じた。そして3年生では、先ほどもお話しに出ていた臓器移植とか、iPS細胞といった問題を取り上げており、その意味では多面的・多角的に生命の尊重、命の重さということについて考える機会がうまく設定されていると思う。</p>
佐野教育長	<p>ドクターの吉村先生、人権擁護委員で大学の教授をされた西中先生、弁護士をされている西村先生、それぞれの立場で本当に貴重なご意見をいただけたなと思っている。道徳において、生命の尊さについて考えるということは、とても重要なことであると考えている。</p> <p>また、道徳科におけるいじめ問題の解決に向けた学びの充実、このことは特に大切ではないかと思う。いじめについては、いじめる側が悪いということや、人権的なことが充実しているものがよいと考えるが、各社、いじめに関する教材はどのように取り扱われているか、ご説明をお願いしたい。</p>
学校教育課長	<p>いじめについて考える教材については、各社それぞれの工夫で力を入れている部分である。</p> <p>例えば東京書籍では、複数の教材で、「いじめのない世界へ」というユニットをつくり、いじめに関わる色々な立場について考えることができる構成となっている。教材については、漫画や絵を活用して、生徒にとって考えやすくなるように工夫がされている。また、発問によって自己を見つめ直す機会やグループで話し合う機会が効果的に設定されている。そのことにより、深く考えられるような工夫がされている。</p> <p>また、日本文教出版では、複数の教材で「いじめと向き合う」というユニットをつくっている。重要な課題として取り扱って、特に1年生では年に3回、ユニットが設定されており、重点的に学習できる構成となっている。教材では、自己を見つめ直す機会の設定が充実しており、学習を通していじめを許さない、またいじめをしない心づくりを目指す教材の工夫がされている。また、1年生では、よく言われている「いじめの四層構造」についても取り扱われており、いじめにおけるさまざまな立場について考えることができるよう工夫がされているところである。</p>
西中委員	<p>今回の道徳の教科化の一つの要因は、いじめ問題である。特に大津の問題が発端ではないかと思う。だから、今までの道徳の授業をやってきたわけであるが、いじめ問題と正面から向き合うということはいまだにあまりされていなかった。どちらかという、やっぱり読み物的な副読本を使って行っていたので、いじめ問題と真正面から向き合って、話し合って、議論して、解決していくというような授業はほとんどされていなかったように思う。だから、このような時間、いじめについて集中的に子供たちが話し合って、考え、議論し、結論を導くための教材が豊富に用意されている教科書は非常に良いのではないかと思う。</p>
吉村委員	<p>生徒全員が自覚なくいじめに加担してしまっているということや、どのようなものがいじめなのかということをしっかり認識できてないということが、こういう痛ましい事件を起こすと思う。道徳の学習が他者との関わりということにおいて、相手の気持ちをどれだけ考えられるか、そこで自分がどういうことをしたのか、自己を見つめ直すという機会が大切となる。先ほど事務局から説明があったように、日本文教では「いじめの四層構造」という、いじめられる方、いじめている方、周りで面白がっている方、見て見ぬふりをしている傍観者であるとか、関係していない生徒はいないということで、やはり誰かが声</p>

	<p>を出して、考えて、議論する道徳ということの原点がここにあると思う。やはりみんなが、関係ない人はいないんだということをしっかり考えられる工夫がされている教科書がいいのではないかと思う。</p>
西村委員	<p>そういう意味では、東京書籍では、いじめに関する教材の部分で漫画とかイラストが割と活用されており、生徒にとって、いじめの問題を非常に身近な問題として受け入れやすいように工夫されているのではないかと思う。</p> <p>それともう一つが、東京書籍の特長として、いじめをテーマにしたものについて、複数の教材がユニットになっているが、学習する時期が1学期の前半に組み込まれている。したがって、それぞれの学級の関係が出てくる1学期の初めのうちに、いじめについて重点的に扱うということは、学校生活において効果的に学習が進めていけるのではないかと思う。</p> <p>もう一つが、日本文教出版についてであるが、自分の感情との向き合い方について触れているのがすごく特徴的だと思う。</p> <p>例えば1年生の42ページ、「怒りの感情と上手につき合おう」ということ、あるいは2年生の41ページで、「自分の考え方を見つめ直そう」、いらいらししやすい考え方をどう変えていくか、であるとか、そういった怒りの感情のコントロールや自分の心のセルフチェックについて学ぶということも、自分を落ち着いて見つめ直す機会として効果的なんじゃないかと感じた。</p>
西中委員	<p>私も同感である。今の中学生に限らず、自分の感情をコントロールできない。特に怒りであるが、それがコントロールできないから、そのはけ口を他者に向けていじめるという中で、この日本文教出版のいじめを多面的に考えるということで、「リスペクト アザーズ」、これは全国中学生の人権作文コンテストの法務大臣表彰を受けた作文が元になっているが、身近な問題として、この人権尊重というものをいじめに限らず、多面的に見ていこうということで非常に良く工夫された教材ではないかと思う。</p>
佐野教育長	<p>これまで指導のしやすさと学びやすさを取り上げている教材のテーマについて、各社の特長や工夫を見てきた。道徳の教科化に伴って、評価については各社どのような工夫がされているのか、ご説明をお願いしたい。</p>
教育部長	<p>道徳の評価についてであるが、この学習の個々の内容・項目ごとに評価するのではなく、年間や学期という大きくくりなまとまりを踏まえて、個人内評価として記述式で行うということになっている。そのために、評価材料としては、道徳ノートやワークシートや感想文、あるいはレポート、スピーチ、プレゼンテーション等、毎時間の授業観察や生徒の発言、エピソード等の記録の蓄積が必要となってくる。その中で、各社の教科書には、そういう記録の蓄積、いわゆる生徒の学びの足跡がわかるような工夫がされている。</p> <p>大きな特長としては、教科書と書き込みができる別冊ノートに分かれている分冊型と、教科書に自己評価、考えや振り返り等を書き込む欄が設定されている一体型に分かれるということで考えている。分冊型については、日本文教出版と廣済堂あかつきの2社となっている。</p> <p>まず、その2つであるが、日本文教出版については、別冊の道徳ノートが教科書の教材ごとの設問、いわゆる「考えてみよう」、「自分に+1」とリンクしているということが特長である。自分の意見や友達の意見等を記述欄となって、1年間の学習記録として個人内評価に生かすことができる工夫がされている。個人内評価とは、指導者であ</p>

	<p>る教員が生徒一人一人にフィードバックする評価のことである。</p> <p>別の分冊型の廣済堂あかつきについては、別冊の中学生の道徳ノートであるが、これは道徳の内容・項目ごとにページが構成されており、1ページのシートが複数の教材とリンクしている等、教材を多角的・多面的に考えられるよう工夫されている。評価の際には、内容・項目ごとの変容を見ることができるよう工夫になっている。</p> <p>これが分冊の2つであるが、残りの6社は一体型となるが、各社によっては特長が異なり、東京書籍については、先ほども言ったように、大きくりなまとまりということで、いわゆる巻末に学期ごとに3回の機会、心に残った教材や学びの振り返りができる切り取り式の振り返りシートというのを設けており、自分の成長を確認することができ、個人内評価にも生かすことができるよう工夫がされている。</p> <p>学校図書については、教材ごとの学びを記述するページが学期ごとにまとめて3カ所、先ほど最初に説明をさせていただいたが、1年生では80ページと172ページと220ページという、この3回に設けられており、学期ごとの個人内評価に活用しやすいように工夫がされている。</p> <p>教育出版については、巻末に学期ごとの印象に残った教材と、考えたことを学期ごとに記述するページが設けられている。生徒が学んだことの振り返りができるように工夫がされている。これも大体学期ごとの記述になっている。</p> <p>光村図書についても、今度は各教材の末尾であるが、考えたことや気づきを記述することができる「学びのテーマ」という1ページが設けられている。生徒は教材ごとに振り返りができるように工夫がされている。</p> <p>学研教育みらいについては、教材の末尾、これも教材ごとであるが、「クローズアップ」や「深めよう」という教材のテーマと関連して考えを深めることができる資料が設定されており、自分の考えや意見を記述できるように工夫されている。</p> <p>最後に、日本教科書については、巻末に1年間の道徳の授業で学んだことや印象に残ったことを記述するページを設定しており、学びの振り返りができるように工夫されているということで、これは内容・項目について自己評価をするという欄になっている。</p> <p>以上が各社の評価の特長である。</p>
西中委員	<p>人格の基盤となる道徳性の評価というのは、なかなか難しい仕事だと思う。今まで道徳の時間、あるいは全ての時間を使って道徳性を養うということでやってきたわけであるが、教科によって評価が義務づけられたが、これを客観的に公正に評価するということは、難しい仕事だと思う。だから、その評価の仕方が、きちんと方法が反映されているような教科書ということで、どのように見ていくのがいいのか。その点についてはどうか。</p>
教育部長	<p>先ほども少しお話しさせていただいた補足という形で申し上げる。中学校の学習指導要領の中には、特別の教科道徳のいわゆる指導計画等の作成と内容の取り扱いの記載の中に、このように述べられている。生徒の「学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある」と。「ただし、数値などによる評価は行わないものとする」といことになっている。つまり、評価基準が道徳の中になくて、個人内評価と先ほども説明させていただいたが、子供たちが学習活動でどのように考えていったのか、という数値ではなく、どのように学習によって子供一人一人が成長しているかと</p>

	<p>ということを見ていかないといけない。ということは、それを最後に大きくくりなまとまりで評価するということは、何らかのそういう記録がなかったら、なかなか難しいということで、ワークシートやあるいはノート等の何らかのそういう方法で記録を残すことが大事になってくるのではないかと思う。</p> <p>そのために各社は、分冊型ではノートへの記述、それから生徒一人一人の学習状況を見とり、評価するということがノートではできるかと思う。それから、一体型でも例えば光村図書の1年生の11ページであるが、先ほどもあったように学びのテーマである。このように、ここに書くことで、そのように自分の考えをまとめながら、教科書の中で、生徒の考え等を記述するページが必要になってくるかなと思う。これは各社等それぞれあるが、当然、分冊に関しても一体型に関してもどちらでも、とにかく自分の考え等を書くということで、学習の中では必ずそれは大事になってくる。成長の様子を把握できるものに記録としてなっていくと考えている。</p> <p>教材ごとに書き込むスペースやページが設けられてない教科書では、逆に別に教員がワークシートを作成し、活用する必要が出てくると考えている。</p>
西村委員	<p>生徒が書き込めるページを設けることによって、生徒一人一人の成長の様子を教員が継続的に把握する手がかりにしていくということだと思う。その場合に、先ほどの説明でも、書き込めるページが1学期分とか1年間とかの学びを総括的に振り返るという形式のものと、1時間ごと、教材ごとに書き込むものと、2つのパターンがあったと思うが、私は1時間ごとに教材ごとに学んだことをその都度記述していくほうが、生徒が授業で感じたこと、学んだことをまだ新鮮な気持ちのうちに書き残していけるので、そのほうが生徒にとっても充実した記述になるのではないかと思う。</p>
吉村委員	<p>今言われたように、その点では日本文教とあかつきが分冊ということで、書くスペースが非常に充実していると思う。一体型でも学校図書や光村図書では、教材ごとに十分な書き込みスペースが確保されていて、やはり評価するには生徒が書いていただかないと評価しづらいので、十分書き込めるスペースが充実しているという教科書が良いのではないかと思う。</p>
西中委員	<p>私も同感であるが、やはり分冊型が基本的には、私個人の考えとしては良いと思う。</p> <p>廣済堂あかつきであるが、これは確かに道徳の理想的な形かもしれないが、こちらは一つの教材で、この教材とノートとが1対1で対応をしていない。だから、ここで授業した内容、ここでは道徳の項目ごとの評価になっている。また、その中に一つの文章があって、これで1冊の道徳の授業ができる。これは、先生方はかなり大変である。両方、1対1で対応していないということで、生徒にとっては、何を書けばいいのか、この授業で習ったこととは違うことをまたここでやるわけである。だから、カリキュラムをきちんと整えなかったら、なかなか大変な仕事になるのではないかと思う。</p> <p>その点、日本文教出版の方は、一つの教材に対応して、1対1対応がきちんとできており、授業が終わったら、このノートを使って書き込む。それを先生方が点検する。分冊であり、かつ教材と一体化している、こういう形が良いのではないかと思う。</p>
吉村委員	<p>昨年度採択して、本年度から使っている小学校の道徳の教科書は分冊型の日本文教出版を使っていると思うが、まだ1学期しか使ってい</p>

	ないが、現場での評価、使い勝手というのはいかがでしょうか。
学校教育課長	実際に今年度使用している小学校現場での評価、使い勝手ということであるが、小学校の管理職、また教員からは、教材ごとに考え等を書き込めるようになっており、1時間の学習活動や授業プランを見通しやすいという意見を我々は把握している。また、分冊であることで、評価を見とる際に全児童のノートを集めることもしやすいという話も出てきている。小学校と同じ分冊型で学びの連続性という観点では、生徒にとって学びやすさがあるかと思う。指導する側からも、生徒が学び方を習得しているということで、より学習内容の中身を充実させた指導が展開しやすくなると考えている。
西中委員	一番冒頭に選定委員長から話があった、親しみやすい教科書という話があったように思うが、今までの内容について、私ども、いろいろな意見を出してきたが、私は特に道徳は、やはりどうしてもかた苦しいという子供たちにもイメージがある。だから、親しみやすさという点で、いわゆる教材の中身は、挿絵、写真、漫画といったようなことをバランスよく展開していく、あるいは資料も豊富にあるというようなことで、このような挿絵は非常に親しみやすいということで、文教出版が非常に親しみやすいというふうに感じている。
佐野教育長	各教育委員の先生方からたくさんのご意見をいただいた。 まず1点目、教材の冒頭に学習するテーマが明示されており、生徒にとっても指導者にとっても目標が明確になり、学習に取り組みやすい工夫がされている点。 2点目に、情報モラルを初めとする生徒にとって身近な現代的な課題を主体的に考えられるよう工夫がされている点。 3点目に、いじめ問題を考える教材において、自己を見つめ直す機会を充実させており、連続して重点的に深く学ぶことができる構成の工夫がされている点。 最後に、生徒が学んだことを記述し、評価に活用しやすい工夫がされており、小・中連携の観点から学び方の連続性という効果が期待される点。 以上の点から、日本文教出版の教科用図書の評価が高く、採択が適切である。
採決	可決。
教育長	これで閉会とする。